

外国における家計研究の系譜 (Ⅲ)

生活標準研究の発展

奥村 忠雄

The History of Studies for Family Budgets in Foreign Countries (Ⅲ)

Development of Studies for Standard of Living

BY TADAO OKUMURA

I

エンゲルの残した三つの問題、すなわち消費単位の制定、生活標準の設定、支出に影響する要因の識別と評価の問題のうち、消費単位研究のその後の発展については本紀要第10巻において紹介した。本稿はつぎの生活標準設定のその後の研究のあとを辿るものである。この問題は貧乏率の測定という必要からイギリスにおいて、また標準生活費の設定という立場からアメリカにおいて発展させられた。

イギリスにおいて貧乏線の設定という必要から、まずこの問題を手がけたのはロウントリー (B. S. Rowntree 1871~1954) であるが、彼の仕事はブース (Charles Booth 1840—1916) の「ロンドン市民の生活と労働」⁽¹⁾ に深く影響されている。すなわちブースは1886年から88年にかけてロンドン貧

第1表 ブースの貧乏分類と貧困率%

H 中流階級の上	}	17.8
G 中流階級の下		
F 上級労働者	}	51.5
E 規則的標準賃金取得者		
D 規則的少額賃金取得者	}	22.3
C 間歇的賃金取得者		
B 臨時賃金取得者		7.5
A 臨時労働者の最下層		0.9

民街の生活調査を行い、世帯ごとに貧乏の程度を判定しようとした。そして「正確な収入をたしかめることはつねにかならずしも可能とはかぎらないから、分類もまた家庭の一般的外観にもとづくものである」として、判定の基準を第1表のように主として職業の性格におき、貧乏率を推算したのである。この際彼はEクラスとDクラスの間に一線を画し、D以下を貧乏 (Poverty) と総称するが、そのうちD、Cを貧困 (Poor)、B、Aを貧窮 (Very Poor) と2段階にわけて

いる。

そして分類の結果からみれば「私は貧困という言葉で、標準家庭で週18志から21志までの規則的な実収入のある世帯を記述しようとしている。貧窮とは慢性的な不規則労働、病気、多数の子供等での水準以下に落ちる世帯である。……収入が独立生活にとって辛うじて充分であるか、あるいは全く不十分であるかによって、それぞれ貧困または貧窮に数えられるのである」と説明している。

このブースの調査に刺戟された製菓資本家ロウントリーは自己の住むヨークにおいて1899年同様の調査を行い、この結果を1901年「貧乏一小都市生活の研究」⁽²⁾として発表した。彼はブースの貧乏の2段階論をうけつぎ、はじめから貧乏を第1次貧乏(Primary Poverty)―単に肉体的能率を維持するに必要な最小量をうるに充分でない稼得者と、第2次貧乏(Secondary Poverty)―その収入が他に転用されないかぎり、肉体的能率を維持するに足る稼得者に規定する。したがってこの基準はブースのような職業の性格やその他の外観ではなく、上の規定に合致した生活費として与えられる。そして家計調査の結果、その収入が第1次貧乏線以下のものを第1次貧乏、第2次貧乏線以下のものから第1次貧乏をさし引いたものを第2次貧乏とするのである。

それでは第1次貧乏線として「単に肉体的能率を維持するに必要な最小量」の生活費はいかに定められたか。彼は食物についてはアトウォーターの栄養表をとって普通程度の筋肉労働に従事する成年男子1日の必要な栄養を熱量3,500カロリー、蛋白質125グラム、成年女子はその8割として2,800カロリー、16才以下の未成年者についても適当な評価をとり、これを安くして栄養価のある食品の献立表に編成し、時価で見積る。その結果は成人週平均3志、16才以下の子供平均2志3片であった。

第2表 ロウントリー5人世帯の週最低生活費(1899年)

家 族	食 事	家 賃	衣 服	燃 料	雑 費	合 計
夫 婦	s d 6. 0.	s d 4. 0.	s d 1. 0.	s d 1. 10.	d 10.	s d 21. 8.
子供3人	s d 6. 9.		s d 1. 3.			

家賃については「貧乏人がもっともきりつめようとするのは家賃である」から「家賃のために現実に支払われている金額を家賃の必要最低限として採用」し、さらに衣服や家庭雑費等については多数の労働者に直接質問してみた

必要最低額が計算された。以上をつみあげて第2表のような週最低生活費が作成されたのである。この生活費が第1次貧乏線であって、収入がこの水準以下であれば第1次貧乏として数えられる。ロウントリーの判定した結果では、ヨークにおける第1次貧乏は同市の全労働階級人口の15.46%、全人口の9.91%であった。

それでは第2次貧乏、すなわちその収入が他に転用されぬかぎりは、単なる肉体的能率を維持するにたるものはいかにして測定されたか。「この生活標準を直接にたしかめるためには、飲酒賭博その他無用な方面につかわれる週平均額と、妻が家政上のやりくりに賢明であるかどうかを知ることが必要である」。この点は戸別調査のさい、近所の情報によってたしかめた上、さらに子供の顔色とか汚雑とかの欠乏の象徴によって判断された。このようにして第2次貧乏線以下は労働階級人口の43.4%全人口の27.84%と算定された。したがってこれから第1次貧乏率をさし引いた第2次貧乏率は労働階級人口の27.94%、全人口の17.93%となる。

さてロウントリーはブースとは異ってはじめてから貧乏率の測定をめざしていたから、貧乏の規定を数量的に定めようとした。このことは批難さるべきことではないが、しかしこのために貧乏の限界を肉体維持の限界にもとめることとなり、貧乏という社会的概念を肉体的、孤立的なものとして扱うことになってしまった。彼は第1次貧乏線ではこの規定を貫徹しえたが、第2次貧乏線ではゆきづまり

結局近所の情報や外観にたよるといふ、ブース以下の方法に後退してしまっている。このとき方法自体についての反省が加えられなければならないにもかかわらず、彼はその後の調査においては困難な第2次貧乏線の設定を放棄し、自己の規定を固執するに至った。このためにブースのとらえた貧乏の性格の2段階説は、長くイギリスの貧乏調査史上あらわれないという不幸な結果を招いてしまったのである。

さらにロウントリーは第一次貧乏線設定に際して、食物、家賃、被服、燃料、雑費等の費用を各個に計算し、これらを合計して全生活費を算出している。そして各費目の内容が家計調査より一定の解釈にもとづいて選択されているが、これが一定の目標にてらして合理的客観的であるという保証はない。かりに食物のように各費目の内容が生活科学的に定められるようになったとしても、品目の種類や価格の見積りに主観性を排除することはできないであろう。のみならず実際生活における各費目間相互の均衡関係は考慮さるべくもないのである。エンゲルが最低生活費を設定しようとしたとき、彼も被服や住居に関して生活科学的な考察を行っていたのであるが、彼の実態家計費の研究は、このような各費目の積み上げ方式を許さなかった。彼は飲食物費のみを計算し、「1ケットにたいして飲食物のために52マルクの金額が年々存在するとすれば、飲食物のための支出は総生活費の62%となる、ということが結論される。だから総生活費の金額もまた与えられているのであって、それは約84マルクと計上される」として生活法則に則った方法を提唱³⁾していたのである。この意味でロウントリーの方法は実態からはなれた架空の計算であり、たとえ生活科学的な配慮を盛っているとはいえ、方法としてはデュークペシオーと異ならないのである。

(1) C. Booth : Life and Labour of the People in London, 17Vols, 1889—1902

(2) B. S. Rowntree : Poverty. A Study of Town Life, 1901

(3) エンゲル(森戸訳)「ベルギー労働者家族の生活費」PP145—152

2

ところがこの後イギリスにおいて数多く貧乏調査が行なわれることとなったが、この場合の貧乏率測定のための基準は、ほとんどがロウントリーの方法を踏襲し、ただ費目内容に若干の改変が加えられたにすぎないのである。主なものをあげれば、まず1915年と1925年のボウレー (Arthur Lyon Bowley 1869～) の「生計と貧乏」¹⁾および「貧乏は減ったか」²⁾がある。

これらはともにイギリスの産業的特徴のある5つの中都市をえらんで、労働者階級の生活条件をあきらかにするとともに、貧乏率の測定を行ったものである。彼もまた週最低生活費を貧乏線として測定基準にしているのであるが、内容もロウントリーと全く同じく最低生活を肉体的生存に必要な支出とし、ロウントリーの消費基準をほとんどそのまま採用し、それぞれの時期の物価で計算しなおしているにすぎない。ただ食物費の算定において、ロウントリーのがあまりにも菜食的であるとして肉類を増加して他を犠牲にしたことと、子供の年齢による要求の異差が一層考慮されているが、被服洗濯、灯火費にいたってはロウントリーのものが全くそのまま採用されているのである。こころみに

第3表 ボウレーの週最低支出額 (1924)

分 類	食物尺度	支出額
成人男子 (18才以上)	100	7. 7. ^{s d}
男 子 (14才—18才)	85	6. 5.
女 子 (14才以上)	80	6. 1.
子 供 (5才—14才)	50	3. 9.
幼 児 (5才未満)	33	2. 6.
年金受領者 (70才以上)	60	4. 7.

被服, 洗濯, 灯火費として16才以上には1人につき 1s. 5d. 16才未満には 1s. 3d. が加わる

なった。第2 ロンドン調査はブースの調査と比較するために行なわれた悉皆調査とボウレーの新たな企画によるサンプリング調査の二つより成るがボウレーがブースの分類に批判を加え改変したのは悉皆調査の場合である。

すなわちボウレーはブース分類における貧乏線下のD, C, Bのクラスを一つにまとめ, Aをのぞく。その理由はDは規則的賃金取得者でありCは間歇的取得者である。両者の区別は収入が発生する方法にあって収入水準によらない。だからこれらは一緒にされる。また臨時賃金取得者たるBクラスはかつてあったよりも現在は非常に少ないので一つのクラスとしてみとめず, むしろCと一緒にした方がよい。最下層たるAクラスは経済的な標準よりも道徳的な標準であるからこれは全部のぞくのである。そしてブースが「貧困という言葉で, 標準世帯で週18志から21志までの規則的実収入のある世帯」を考えていたのをとらえて, 40年前21志で買えたものは1928—30年では40志を要するから,

第4表 ボウレーの貧乏分類

ブースの 符 号	週 収 入	ボウレー の 符 号
H, G	週 5 £ 以 上	M
F	週3 £以上5 £まで	S
E	週2 £以上3 £まで	U
D, C, B	週 2 £ ま で	P

以上を表示しボウレーの新符号で示せば第4表のようになる。要するにボウレーはブースの社会階級分類を一つずつ攻略し, これをただ収入階級別分類に改変してゆくのである。40年前のブースの分類をただの収入水準と考え, これを現在の価格水準に換算しているにすぎないのである。

この悉皆調査における基準がなお収入に着目しているのに対し, 新企画のサンプリング調査の基準はロウントリーの方法によって生活費によって算定されている。もっとも1899年のヨークや1924年の5都市の場合に対して, 1929年のロンドンの場合では, とくに食物費において若干の修正は企てられてはいる。たとえば成人1日の熱量は 3,600カロリーと定め, 肉, パン, 茶は増加されオートミル,

1924年のボウレーの週最低支出額をかかげると第3表のようである。

ところが1928年には40年前のブースの調査と比較する目的をもって第2 ロンドン調査が行なわれ, この結果は1930年から35年までの間に「ロンドンの生活と労働の新調査」³⁾として出版された。この調査の委員長はブース調査に参加したスミス (Sir Hubert Llewellyn Smith) であるが, 彼はこの調査の技術的指導をボウレーに委嘱したのである。そこでボウレーはブースの職業の性格による貧乏分類と対決せざるをえなく

標準世帯で週収入40志をもって新貧困の上限と定めた。つぎに貧乏線以上のクラスについては, H, Gをわけるに手がかりとなっていた召使の数は指標としての意味はないので一緒にし, 週5 磅以上と規定する。これに反してブースが調査の後半では一緒にしていたF, Eは前者を熟練労働者クラスとして週3 磅—5 磅, 後者を不熟練労働者を代表するものとして週2 磅—3 磅にわけている。

チーズはへらされた。また脱脂乳は新鮮な生乳やコンデンスミルクに代えられ、食物費は週7志1片と計算された。しかしその他の費目、たとえば衣服はただ価格上の修正が加えられ成人週1志1.5片子供11.5片、洗濯、灯火、雑費等は1924年に比し価格上の変化もないとして週5.5片、燃料費も週3志としてそのまま据置かれている。これが新貧乏線であって、貧乏を肉体維持にかかわらしめている点も、算定に積み上げ方式をとっている点もロウントリーと同様であって、ロウントリーへの批判はそのまま妥当するのである。なおこのボウレーの貧乏基準は1929年にリバプール大学によって行なわれた低収入階層の生活調査、すなわちマーシサイド調査⁽⁴⁾にも採用されていることを附言しておく。

ところで悉皆調査の結果はブースの調査と比較することができる。すなわちブースの旧調査地域のみについてみると貧乏率は9.6%となるから、ブースの時代の30.7%に比し、割合において貧乏は40年間に3分の1に減じたと告げられている。またサンプリング調査は、ヨーク、5都市、マーシサイドの諸調査と比較しうる。すなわちロンドン東部では労働階級人口に対して11%が肉体的貧乏線以下にあると計算されたが、これが1899年のヨークでは15.5%、1924年の5都市では6.5%、1929年のマーシサイドでは16%であったのである。

このようにみえてくるとボウレーが一方悉皆調査においてブースの分類にたちつつそれを便宜的に数量化しようとしたことも、地方サンプリング調査においてロウントリーの方法を踏襲したことも、すべての過去の調査との比較を可能ならしめるためであったことが判明してくるであろう。事実ボウレーは同書において、第2ロンドン調査の主な目的の一つは現在と過去の正確な比較をうることにあつたから、「文明化された生存に必要な最低必要物を構成する一般的見解に変化があつた」にしても「その間の購買力の変化をのぞいて、他のいかなる変化にも関係のない同じ標準を保持することが必要であつた」、したがって「貧乏」(Poverty)や「貧困」(Poor)は単なる技術的用語で使用されているのであって、「貧乏を測る標準は現在の情勢的な標準を代表するものではない」ことを注意しているのである。だからボウレーに「情勢的な標準を代表する」基準を期待するのは、はじめから無理であつたわけである。

(1) A.L. Bowley and A.R. Burnett-Hurst: *Livelihood and Poverty*, 1915.

(2) A.L. Bowley and M.H. Hogg: *Has Poverty Diminished?*, 1925.

(3) Sir H.L. Smith: *New Survey of London Life and Labour*, 9 Vols, 1930—1935.

(4) D. Caradog Jones: *The Social Survey of Merseyside*, 3 Vols, 1934.

3

さてブースのロンドン調査に第2ロンドン調査があるように、ロウントリーの調査にも、第2および第3ヨーク調査がある。そしてこれをはたしたのがほかならぬロウントリー自身なのである。1936年にロウントリーはふたたびヨーク市民の生活調査をこころみ、その結果を1941年「貧乏と進歩—第2ヨーク社会調査」⁽¹⁾として発表した。この調査はその題名がしめすように、第1調査以来の約40年間にヨークの労働者の生活水準がどれだけ向上し、貧乏率がどれだけ減少したかを比較によってた

しかめようとするものであった。そしてこの場合でもやはり貧乏線を設定しているのである。

ところで彼は早く1918年に「労働の人間的要求物」²⁾という書物を書いているが、これを1937年には最新の知識をもって改訂し、同名の書物として発表している。この書における研究が第2調査の貧乏線の内容を決定しているのである。まず食物であるが、これについては1933年に英国保健協会(British Medical Association)が任命した「健康と労働能力を維持するに必要な最低支出を決定する」ための専門家の委員会の報告を採用し、成人男子の1日の必要熱量3,400カロリー、蛋白質100グラム、脂肪100グラム、含水炭素500グラム、ビタミンと塩分は3栄養素をふくんだ食物の適当な配合であれば不足しないとしている。そこで収入階層別に28世帯について家計調査を行い、家計にでてくる食物の種類と価格を研究した。このようにして委員会の表とにらみ合わせて献立表をつくり、1936年の価格によりその費用を計算した。その結果は夫婦子供3人の標準世帯で週20志6片が食物の必要最低額であった。

つぎに家賃は労働省調査を参考にし週9志6片、衣服はサンプル調査を行って男週3志、女1志9片、子供1志1片として標準世帯で8志、燃料費も調査により年間を通じて週4志4片、残った灯火洗濯、その他の家事消耗品等の家庭雑費は1志8片とそれぞれ定められた。ところで新に文化的雑費として9志が加えられることになった。その内訳は失業および健康保険1志7片、疾病埋葬クラブ費1志、労働組合費6片、通勤1志、新聞7片、切手便箋6片、ラジオ6片、その他のビール、煙草、贈物、休暇、書物、旅行等は3志4片である。この費目は1899年ではわずか10片にすぎないものであって、ここに肉体的生存費より人間的生活費への移行があるといわれているものである。以上を合計

第5表 標準世帯の週最低支出額(1936年)

食	物	費	20.	6.
家		賃	9.	6.
衣	服	費	8.	0.
燃	料	費	4.	4.
家	庭	雑	1.	8.
文	化	雑	9.	0.
合	計		53.	0.

すれば第5表のように標準世帯の週最低支出額は53志となる。

これが第2ヨーク調査の新貧乏線である。この新貧乏線は第1調査における第1次貧乏線に比較すれば、はるかに高くなっている。すなわち第1次貧乏線における標準世帯週21志8片より家賃を差引いた17志8片を、1936年の物価で換算すれば30志7片となるが、これと新貧乏線における53志より家賃を差引いた43志6片を比較すればよい。このことは旧貧乏線の算定が肉体的生存費としても不当に安か

ったことを物語るものであり、このために当時彼は第2次貧乏線の考え方に進まざるをえず、近所の情報とか欠乏の象徴とかの主観的判断を導入して、第1次線の窮屈さを救済しようとしたのであった。すなわちロウンリーの2段階規定は、ブースのように社会的存在の認識からではなく、調査技術の必要性からであった。したがって貧乏線の拡張をこころみた第2調査では、第2次貧乏の考え方は簡単に放棄されているのである。そこでこの結果をみると、新貧乏率は労働階級人口の31.1%、全人口の17.7%であった。これをさきの第1調査における第2次貧乏線までの貧乏率と比較してみると前者が43.4%、後者が27.8%であったから、あきらかに「貧乏」は減少し、社会は「進歩」したもの

と断じている。

ところでこの貧乏線について、ロウントリー自身は予備調査の過程において「実際、調査を遂行してみると、週53志で5人世帯を保持することは、たとえ収入が年52週保証されているときでも、主婦の絶えざる配慮と高度の技術を要するものであることがますますわかってきた。さらにいえば、全収入は肉体的健康に絶対に必要なもののみを用意するだけで消えてしまう」とし「あやまりがあるとすれば寛大の側よりも、むしろ厳格の側にある」と反省しているのである。しかしこの反省は各費目の内容に向けられるよりも、貧乏線の算出方法自体に向けられなければならなかったのである。

ロウントリーはさらに1950年には、同じ目的をもって第3ヨーク調査を行い、その結果を1951年に「貧乏と福祉国家」³⁾として発表している。この場合の夫婦と子供3人の標準世帯の貧乏線は、第6表の通りである。概ね1936年の標準を物価換算したものであるが、ただその後の資料にもとづいて各費目に若干の品目換えが行なわれている。これはその後の消費傾向の変化に着目した改訂であって水

第6表 標準世帯の週最低生活費
(1950年家賃を除く)

食 物 費	47. ^s	4. ^d
衣 服 費	27.	9.
燃 料 費	7.	7.
家 庭 雑 費	6.	0.
文 化 雑 費	11.	6.
合 計	100.	2.

準には関係はないといわれているものである。しかしたとえば文化雑費等の内容は時代とともに大幅に変化する性質のものであり絶対水準で測りうるものではないにもかかわらず、9志から11志6片への増加にとどまり、物価騰貴にもおよばない点からみれば実質的には切下げられているとみるほかはない。そしてこのように主観的、目的的に勝手に内容の改変を許すのがロウントリーの積み上げ方式の特長なのである。

この貧乏線によって測定されたヨークの貧乏率は、労働階級人口の2.77%、全人口の1.66%であった。そしてこのわずかな貧乏も、大部分は老令と、主な賃金稼得者の永久の疾病にもとづくものであって、働きうる労働者の失業によって貧乏に数えられているものはもはや一つもないとし、完全雇傭政策と社会保障制度の効果を称揚するのである。このようにしてヨークの製菓資本家の半世紀にわたる調査事業の努力は、「貧乏」から「貧乏と進歩」へ、さらに「貧乏と福祉国家」への発展を謳歌することに終始し、合理的な生活費を用いた測定基準はその手段として利用されるのみで、その理論的、技術的發展は後にのこされることになった。⁴⁾

(1) B.S. Rowntree: Poverty and Progress. A Second Social Survey of York, 1941.

(2) B.S. Rowntree: The Human Needs of Labour, 1918, 1937.

(3) B.S. Rowntree and G.R. Lavers: Poverty and The Welfare State. A Third Social Survey of York dealing only with Economic Questions, 1951

(4) イギリス貧乏調査の詳細な批判的紹介として、著者稿「社会調査史上における貧乏」（「資本主義と貧困」日本評論新社刊所収）がある。

以上のイギリスにおける一定の生活標準設定の技術は、はじめから「貧乏の測定」ということに結

びついたために制約をうけてきたと考えられる。すなわち一つは一定の生活費が「貧乏」の表示としてとられたことであり、他はこのためにこの標準を机上理論的に組立てることが要請されたことである。まず「貧乏」という概念が、肉体の維持が可能か否かによって示されるかどうかについては議論のあるところであろう。これについては、ここではツワイク (Ferdinand Zweig 1896~) の貧乏線についての3つの分類をあげるにとどめておこう。¹⁾ ツワイクは貧乏水準の1つは社会的評価によって決まるという。すなわち、社会が何人もそれ以下に陥ることを許さない健康と体裁の最低標準がある。したがってこの標準はその社会の社会保障の水準でしめすことができる。この社会的標準は、その社会の経済力、連帯感、貧乏量や貧乏についての考え方等によって影響を受けるが、とりわけ貧乏についての考え方が重要である。なぜなら、もし社会が貧乏人を被救恤者とみるならば、保護水準は単に生存と体裁をみだす人道的な低い水準におちつくであろうし、またもし社会が貧乏人を国民経済の能率にかかわらしめて労働力としてとらえるならば、保障水準は最低の労働力再生産費の水準になるからである。つぎは、主観的な貧乏感による貧乏水準がある。これはくらしがうまくゆかないことの苦痛であって、親戚や社会事業団体や社会に救助を求めることによって表現される。この要求水準はその本人なり世帯の個別的な経歴、職業、環境等に依存するからかなりの差があり、健康や体裁の水準から働くに必要な水準やさらに働き口そのものを求める者までである。さて貧乏標準の第3のものとして「科学的水準」がある。これは生理学や心理学によって健康と体裁の最低を維持するに必要な消費水準として作成されたものであり、社会事業や社会政策の目的からではなく、測定のための絶対水準である。これは各費目の内容が目的に合わせて科学的に算出されることが技術的に困難であるばかりでなく、これらを積み上げた生活費が現実にとなまれるという保障はない。したがってこれを貧乏線というのはただ言葉の問題にすぎない。

ツワイクは以上のように貧乏概念を3つに分類しているのであるが、このうちはじめの二者は現実に存在している貧乏標準であり、後者は机上的に作られた貧乏標準である。もしも後者によって現実の貧乏を測定しようとするのであれば、後者は前二者を何等かの形で表示したものでなければならぬが、その困難と遊離が指摘されているのである。このことから彼は貧乏調査には、ル・プレーやブーースの方法にかえて総合的な判断が必要であることを強調しているようである。がここではロウン トリー以来の貧乏線の方法が、真の貧乏標準を代表しているかどうかの批判はツワイクに委ねることにしよう。ここでの問題は一定の目的標準に合致した合理的、実証的な設計がなしうかどうかにか ぼられる。この点ロウン トリーの導入した方法は合理的であっても、実証性に乏しく、むしろエンゲルの方法よりも後退したものと考えられるであろう。

- (1) F. Zweig: *Labour, Life and Poverty*, 1948, Chap XX.
F. Zweig: *Men in the Pits*, London, 1948.

5

ところでアメリカにおいては家計調査はやはり貧乏調査と関連しているが、この場合は貧乏率の測定というよりも、むしろこのような調査を通じて生活標準 (Standard of Living) を発見するとい

うことにかかっていたために、この標準を生活の実態の中からとり出すことに関心がもたれていた。たとえばモア (Luise B. More) は1903年から1905年にかけてニューヨーク西部のグリーンウィッチ

第7表 モアの家計調査の結果

収入階層 (ドル)	エンゲル係数	消費額 収入額 ×100
200~ 400	44.2	104.0 (-)
400~ 500	44.4	101.8 (-)
500~ 600	50.1	101.8 (-)
600~ 700	45.5	100.9 (-)
700~ 800	44.2	99.0 (+)
800~ 900	45.8	99.3 (+)
900~1000	45.8	99.8 (+)
1000~1200	43.6	98.3 (+)
1200~1500	39.5	97.3 (+)

地区において 200 世帯の詳細な家計調査を行っている。その結果⁷⁾によると世帯 (5.6人) の平均収入は 851ドル、平均支出836ドルであったが、第7表のように700~800ドルで黒字家計に転じるをもって、週収14ドル、年収728ドルをもって公正生活賃銀 (Fair Living wage) としたが、これに貯蓄をみこんで年収800~900ドル、すなわち平均水準をもって標準生活収入とみなしている。なおこの調査で彼女は第7表にみるようにエンゲル法則の修正を提示している。また1906~7年にはチェイピン (Robert C. Chaipin) がラッセルセイジ財団の委嘱によってニューヨークの 391

世帯の家計調査を行っているが、その結果²⁾によると調査世帯の4分の3が年収600~1,100ドルの階層に所属していることから、標準収入を825ドルと見積っている。これらのほか1911年にはストレイトフ (F.H. Streightoff) ³⁾ は家計のエンゲル的な研究の後に貯蓄を含まない全国的な労働者世帯の最低年収を650ドルと計算し、1913年にはニヤリング (S. Nearing) ⁴⁾ は標準年収を750ドルとし大都市ではこれに家賃代として100ドル増を、さらに1914年にはホルンダー (T. H. Hollander) ⁵⁾ が700~800ドルを唱えている状態である。

以上の生活標準の算定は、実際の家計調査の結果より裁定したものであるから、対象により、地域によって多少相違している。しかし、パームリー (Maurice Parmelee) の概観⁶⁾によれば、1910年当時で週収11.5ドル、年収600ドル程度が標準世帯の肉体維持水準であり、週収15.4ドル、年収800ドル程度が最低の生活水準とされているから、この水準を1909年当時労働局が北部アメリカにおいて行った家計調査に適用してみると、標準生活以下は24%あり、このうち8%が肉体維持困難な状

第8表 合衆国労働局の家計調査

(1909年)

週収 (ドル)	世帯数	子供数	平均週収入	夫平均週収入	子供の援助率 (%)
~ 9.7	67	1.78	8.76	8.16	2.1
9.7~14.6	532	2.06	12.42	11.53	3.3
14.6~19.5	1036	2.46	16.99	15.16	5.4
19.5~24.3	545	2.88	21.51	17.14	12.5
24.3~29.2	437	3.07	26.10	19.11	16.9
29.2~34.0	224	3.03	31.38	19.14	30.0
34.0~38.9	131	3.82	36.13	19.98	32.4
38.9~	243	4.20	50.33	22.34	47.7

態にあることになる。なお上の第8表では高収入世帯ほど子供数が多く、高収入は子供の援助に依存していることが示されているが、この点より類推してパームリーはアメリカにおいても労働者の生涯において貧乏と繁栄の循環がみられるとのべている。

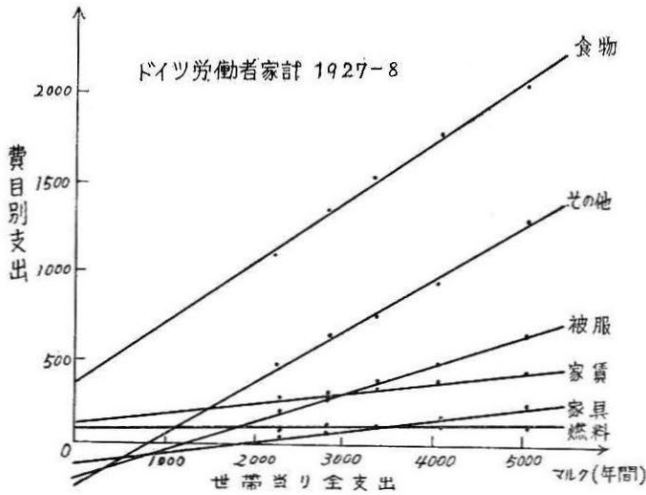
以上のように、アメリカにおいては家計調査より生活標準を発見するという手続がとられている。そしてこの標準をもとにして一種の生活水準の判定のような作業が行なわれているのであるが、しかしこの標準について厳密な規定があるわけではない。家計調査における平均収入や、収支均衡点はそれだけでは何の生活的意味もない。それがある目標、たとえば「標準生活」に対して、合理的であるという保証を見出すことができない。生活標準の設定は、具体的なものでなければならず、そのかぎり実態生計費の方法でなければならないが、しかし同時に裁定は合理的でなければならない。アメリカの方法は実証的ではあるが、裁定についての理論的、技術的反省が欠けているといわなければならないであろう。なおアメリカにおいては生活問題の研究は、ライト以来つねに家計調査とともにあるが、生活標準の研究は主として第1次大戦頃までであり、それ以後は生計費指数作成のための品目やウェイトの決定、さらに需要測定の研究等に移行してくるのであって、生活標準設定の技術的發展についてはその後みるべきものがないといってよいであろう。

- (1) L.B. More : Wage Earner's Budgets, New York, 1907
- (2) R.C. Chapin : The Standard of Living among Workingmen's Families in New York City, New York, 1909. この附録にル・プレー論文の英訳がある
- (3) F.H. Streightoff : The Standard of Living among Industrial Peoples in America, Boston, 1911
- (4) S. Nearing : Financing the Wage Earner's Family, New York, 1913.
- (5) T.H. Hollander : The Abolition of Poverty, Boston, 1914.
- (6) M. Parmelee : Poverty and Social Progress, New York, 1920, PP92-93

6

そこで今後の問題は、合理性と実証性を統一した第3の方法を発見することにかかってくるであろう。エンゲルの方法はこの要請に一応かなっているものではあるが、しかし基準となる飲食物費の内容決定に実証性が貫徹していないといううらみがある。そこで、ここでは1935年にでたアレン (Roy George Douglas Allen 1906~) とボウレーの家計支出論¹⁾の方法を紹介し、この問題の展望をあたえておこう。この書で彼らは一定の生活標準の設定の方法を提示しているわけではない。ただ家計支出における各費目の支出額が、全支出額の変化と関連してどのように変化するかというエンゲル的な研究を行い、その変化の度合によって各費目の緊要性の序列 (an order of urgency) を測定したのであるが、この方法の拡張適用が考えられないであろうかということである。

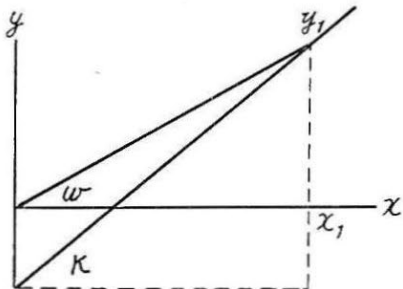
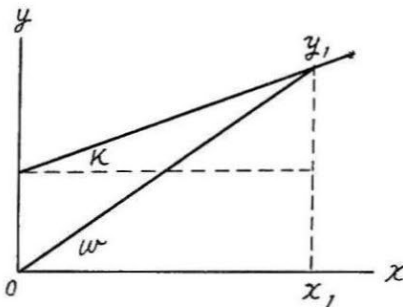
彼らは図のように横軸に全支出、あるいは可処分収入をとり、縦軸に各費目をとると、各費目は収入の増加するにしたがって増加し、概ね直線的に増加する。しかし各費目によって増加の仕方がちがうので、この支出線 (エンゲル線) の横軸に対する傾きは、それぞれ異なる。ところで、いま調査不能の低収入層にもこの直線の延長が妥当するものと考え、たとえば食料費、家賃、燃料費は収入が



零になっても零にならないで縦軸を正の値できり、その代り家具什器費被服費、雑費等は収入が零になる前に零になり、縦軸を負の値できることになる。このことは正の値をとる費目は、収入が零になっても必要であることをしめし、負の値をとる費目は不要であり贅沢的であることをしめすものと考えられるから、この直線が縦軸をきる截片の正負の大きさを係数化することによって、各費目の緊要性の序列が示されうると考

えるのである。

ところで縦軸をきる截片の大きさは、その費目への支出額の絶対額に依存するから、これをもって



直ちにその費目の緊要性をしめすことはできない。そこで図のようにその費目のエンゲル線が横軸となす角度を K とし、ある収入点 X_1 における支出割合 $\frac{Y_1}{X_1}$ を W とすれば $\frac{K}{W}$ が 1 よりも小であれば截片は正であって必要性を示し、そしてその値が小なるほど必要性が高まることを、また $\frac{K}{W}$ が 1 より大であれば截片は負であって贅沢性を示し、そしてその値が大なるほど贅沢性が高まることをあらわすと考えることができる。ただし、 W は X_1 の移動とともに変化するから、たとえばエンゲル線が直線形であって K が一定であっても、 $\frac{K}{W}$ は変化するから、上の規定は収入 X_1 点における各費目の緊要性の相対的序列であるといわなければならない。そこでアレンとボウレーはその集団の平均収入点 \bar{X} における値をもってその費目の緊要性を規定しようと考えているのである。

ところが、その後の研究によればエンゲル線はかならずしも直線形をなさず、むしろ 2 次曲線（ニコルソン）、指数曲線（ストーン）、半対数曲線（プレイス）等がより適合的であることがつけられている。してみると K は一定ではなく X とともに変化するから $\frac{K}{W}$ はますます複雑な動きをしめすことになる。したがって各費目あるいはそれらの合計である消費支出の緊要性は、収入の変化とともにさまざまに変化をする。

ここで一般形として K を $\frac{dY}{dX}$, W を $\frac{X}{Y}$ と表現すれば $\frac{K}{W}$ は $\frac{dY}{dX} \cdot \frac{X}{Y}$ である。これが支出の収入弾力性係数 (Coefficient of income elasticity) である。そこでとりわけ消費支出の収入弾力性係数のある変化に着目して一定の生活標準の裁定の可能性が考えられよう。しかしこれを一定の生活標準の表示に結びつけるには、第一に調査資料における支出が収入のみの関数であるように調整されなければならない。このためには支出に影響する要因の識別と評価がなされなければならない。しかし「家計支出論」の第二章はなお資料吟味の方法を呈示するにとどまっているし、アメリカの消費関数論争の成果をこのようなミクロ的な分析方法に導入するにはなお距離がありすぎるようである。

第二に裁定の理論的用意がされなければならない。「家計支出論」の第三章では消費者選択理論によって無差別図形における支出拡張線の性格が検討されているけれども、弾力性係数の変化と効用水準の関係を論ずるに及んではない。してみると生活標準設定の最終的方法である実態生計費による方法は、エンゲルの残した第三の問題、すなわち支出に影響する要因の識別と評価の問題とからまりあって戦後に持越されたといつてよい。そこで次回ではこの第三の問題の研究史に移り、ついでその総合研究として実態生計費の方法に入ることにしたい。

- (1) R. G. D. Allen and A. L. Bowley : Family Expenditure. A Study of its Variation, 1935.